

第6章 問題の所在と本研究の目的

本章では、友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響についての先行研究の問題点を指摘し、本研究の目的及び仮説について論じる。

まず、第1節と第2節において、第1章から第5章までの論述を踏まえて、先行研究における問題点を指摘する。次に、第3節において、第1節と第2節で指摘された先行研究の問題点を踏まえて、本研究の目的と仮説について論じる。

第1節 評価目標を接近と回避の次元（評価—接近目標と評価—回避目標）に区別する必要性—評価—接近目標と評価—回避目標は抑うつ傾向に異なる影響を与える—

第5章において論じられた通り、Dweck & Leggett (1988) の理論においては、社会的属性や対人関係の発展、社会的視野や対人経験の獲得を目指す「学習目標」をもつと抑うつ傾向に陥りにくく、自己の社会的属性について良い評価を得て、悪い評価を避けようとする「評価目標」をもつと抑うつ傾向に陥ると仮定されていた。しかしながら、Erdley et al. (1997) による研究の結果は、Dweck & Leggett の理論を支持するものとなっていない。

以上を踏まえて、本研究では、Dweck & Leggett (1988) の友人関係における目標志向性理論に問題点があることを指摘する。より具体的に

は、Dweck & Leggett の理論における「評価目標が抑うつ傾向をもたらす」とする予測に問題点があると考え、すなわち、評価目標でも、社会的属性についての「悪い評価」に関心を示すことは、Dweck & Leggett の理論通り、抑うつ傾向を促進するが、社会的属性についての「良い評価」に関心を示すことは、むしろ、抑うつ傾向を抑制するであろうと予測する。

以上のような、評価目標の抑うつ傾向に及ぼす影響についての仮説は、近年の学業領域における目標志向性に関する研究、及び、承認欲求に関する研究の知見に基づいている。そこで、まず、第1項において、近年の学業領域における目標志向性に関する研究を概観し、次に、第2項において、承認欲求に関する研究を概観する。最後に、第3項において、評価目標でも、「良い評価の獲得」を目指す「評価—接近目標」と、「悪い評価の回避」を目指す「評価—回避目標」とは、抑うつ傾向に異なる影響を与えるという仮説を提示する。

第1項 学業領域における目標志向性研究の概観

ここで、対人関係領域における目標志向性に関する研究を離れて、近年の学業領域における目標志向性研究に目を転じてみると、次のような知見が見出されている。つまり、学業領域における評価目標（知的能力の評価に関心を示す目標）は、知的能力について他者より勝ろうとする（例えば、テストで他者より良い成績をとろうとする）「評価—接近目標（performance-approach goal）」と、知的能力について他者より劣ることを避ける（例えば、テストで他者より悪い点を取らないようにする）「評価—回避目標（performance-avoidance goal）」の2つの異なる次元

に区別されることが示されている。そして、前者は高いテスト成績などの適応的な学業結果をもたらし、後者は低いテスト成績や高いテスト不安などの不適応的な学業結果をもたらすことが示されている (Elliot & Church, 1997 ; Elliot & Harackiewicz, 1996 ; Elliot & McGregor, 1999 ; Elliot, McGregor, & Gable, 1999 ; Elliot, Sheldon, & Church, 1997 など)。

上記の Elliot の一連の研究によれば、接近と回避の 2 つの評価目標が目指す最終的な結果はそれぞれ異なっているため、両者は個人の達成状況における認知・感情・行動を異なった方向に向かわせると仮定されている。具体的には、評価－接近目標の目指す最終的な結果とは、自分の能力に関する望ましい結果（自分の能力が他者より優れていること）の獲得であり、達成状況における個人の注意の焦点や感情、達成結果の解釈、達成行動は、自分の能力についての望ましいポジティブな結果に向かって方向づけられる。その結果、高い能力を表す情報への偏った注意、失敗場面でのポジティブに偏った解釈、達成課題への没頭、成功するための積極的な方略の実行がもたらされる。他方、評価－回避目標の目指す最終的な結果は、自分の能力に関する望ましくないネガティブな結果（能力が他者より劣っていること）の回避であり、達成状況における注意の焦点や感情、達成結果の解釈、達成行動は、その最終的な結果（能力についての望ましくない結果）へと方向づけられる。その結果、否定的に評価されることへの敏感さ、失敗したらどうしようという不安感や注意散漫、失敗を回避するための消極的な方略がもたらされる。

このように、Elliot によれば、目標は、個人の認知・感情・行動を（その目標の獲得や回避に向かって）方向づける自己調整の型（form of self-regulation）として捉えられている。評価－接近目標と評価－回避

目標に関していえば、評価－接近目標は、個人の達成状況における注意や解釈・感情・行動をよりポジティブな方向へと導き、評価－回避目標は、それをよりネガティブな方向へと導く自己調整の型であると考えられている。このような違いのために、評価－接近目標は適応的な学業結果をもたらす、評価－回避目標は不適応的な学業結果をもたらすとされている (Elliot & Church, 1997; Elliot & Harackiewicz, 1996; Elliot & McGregor, 1999; Elliot et al., 1999 など)。

第2項 承認欲求に関する先行研究の概観

評価目標が、ポジティブな評価を得ようとする目標と、ネガティブな評価を避けようとする目標という、異なる次元の目標に区別されることは、承認欲求に関する研究からも示されている。

菅原 (1986) によれば、承認欲求には、他者から賞賛されたい欲求 (賞賛獲得欲求) と拒否されたくない欲求 (拒否回避欲求) の2つの異なる欲求があり、これらはそれぞれ独立した次元にあることが示されている。

そして、この2つの異なる承認欲求の内、特に、拒否回避欲求は、他者からの否定的な評価に敏感にさせ、対人不安を促進するとされている (菅原, 1996)。つまり、ネガティブな評価を回避しようとするほど、他者からのネガティブな評価や自己のネガティブな側面に注意が向かうと考えられる。そして、2つの異なる承認欲求は、対人不安と異なる関係を示すことが見出されている (太田・小島・菅原, 1997; 佐々木・丹野・菅原, 2001)。

まとめると、承認欲求に関する研究からも、他者からポジティブな評価を得ようとする目標 (賞賛獲得欲求) とネガティブな評価を避けよう

とする目標（拒否回避欲求）は、異なる次元の目標であり、他者及び自己への異なった注意の向け方や状況解釈の仕方をもたらすと予測される。

第3項 友人関係における評価目標を評価—接近目標と評価—回避目標に分ける必要性—両者は抑うつ傾向に異なって影響する—

第1項と2項における、学業領域における目標志向性に関する Elliot の一連の研究と、承認欲求に関する菅原の一連の研究を踏まえると、Dweck & Leggett (1988) における「友人関係における評価目標は抑うつ傾向を促進する」とする仮説には問題点があると考えられる。すなわち、評価目標の回避の次元（これを Elliot にならい、「評価—回避目標」とする）は、Dweck & Leggett の理論通り、抑うつ傾向を促進するが、接近の次元（これを Elliot にならい、「評価—接近目標」とする）は、Dweck & Leggett の理論に反して、抑うつ傾向を抑制することが予測される*。

本研究の第1の目的は、評価—接近目標と評価—回避目標が、抑うつ傾向に異なる影響を与えるという仮説を検討することである。

なお、本研究においては、Dweck & Leggett における学習目標と評価目標を次のように定義する。まず、学習目標に関しては、Dweck & Leggett

* 菅原の承認欲求における一連の研究と本研究との違いは以下の2点である。第1に、予測しようとする変数が異なっている。すなわち、菅原の研究は対人不安の予測を目的とし、対人不安についての研究の文脈で検討が行われているが、本研究は抑うつ傾向の予測を目的とし、抑うつ傾向についての研究の文脈の中で研究を行っている（この点については第2節で詳しく述べる）。第2に、承認欲求と評価目標の内容の違いである。すなわち、菅原の研究では、何についての賞賛を獲得しようとしたり、拒否を回避しようとするか、については考慮されていない。例えば、菅原(1986)や太田他(1997)の承認欲求尺度の項目をみると、「能力を積極的にアピールしたい」などのように知的能力についての賞賛獲得の欲求もあるが、多くは「みんなから注目を浴びたい」などのように、自己の特定の特性には関係しない承認欲求があげられている。それに対して本研究では、Dweck & Leggett (1988) の理論に依拠し、「社会的属性（パーソナリティや社会的スキル）について良い評価を得ることないし悪い評価を避けること」というように、社会的属性に関する評価目標が取り上げられている。

(1988) の定義の内、「対人的経験の獲得」及び「自己の成長」を目指す目標を取り上げ、これらを統合した、「自分とは違った性格や考え方をもち友人と積極的に関わってみるという経験を通して、自己を成長させることを目指す」目標を取り上げる。そして、この目標を、「経験・成長目標」と命名する*。対人的経験の中でも、特に、自分とは異なる性格や考え方をもち友人と関わって、その性格や考え方について知るという経験は、中学生の自己（自分の性格や他者理解などの社会的視野）の成長にとって重要であると考えられる。

そして、評価目標に関しては、Dweck & Leggett の理論においては、「パーソナリティや社会的スキルなどといった社会的属性についての良い評価を得て悪い評価を避けること」と定義されているが、本研究では、社会的属性の内、友人関係において中学生が関心を示しやすいと考えられる「パーソナリティ（性格）」を取り上げ、「性格について良い評価を得ること」（評価－接近目標）、及び「性格について悪い評価を避けること」（評価－回避目標）とする。

第2節 友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズム

第1節において、Dweck & Leggett (1988) の理論通り、経験・成長目標は抑うつ傾向を抑制し、評価－回避目標は抑うつ傾向を促進するが、

* 「経験・成長目標」という用語に関しては、その内容、及び、用語のもつ意味のわかりやすさ、という観点から、「学習目標」よりも「経験・成長目標」の方が適切であろうと考え、命名を行った。

Dweck & Leggett の理論に反して、評価－接近目標は抑うつ傾向を抑制するであろうと仮定した。

それでは、3つの目標と抑うつ傾向との関係は何故このようになるのであろうか。特に、Dweck & Leggett の理論において抑うつ傾向を促進するとされていた評価目標の内、評価－回避目標のみが抑うつ傾向を促進し、評価－接近目標は抑うつ傾向を抑制するのは何故か。これらの疑問に答えるために、本研究では、3つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムについても検討する（本研究の第2の目的）。

ところで、目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムとしては、従来においては、「素因ストレスモデル」と「ストレス生成モデル」の2つのモデルしか仮定されていなかった（Dykman, 1998）。しかしながら、目標志向性と抑うつ傾向との関係には、より多様なメカニズムが介在していると考えられる。

本研究では、Dykman (1998) により提唱された2つのモデルに加えて、新たなモデルを提唱する。すなわち、ディストレス（ネガティブな対人出来事）が引き起こされるプロセスのみに焦点を当てていた、従来のストレス生成モデルを拡張し、ユーストレス（ポジティブな対人出来事）が引き起こされるプロセスに注目した、「ユーストレス生成モデル」を提唱し、このメカニズムも検討する（ここで、ディストレスのみに焦点を当てていた従来のストレス生成モデルを、「ディストレス生成モデル」とよぶ）。

さらに、従来のストレス生成モデルは、「ストレス」を「比較的客観的に測定されるネガティブな刺激(ストレッサー)」として仮定していた。そして、このネガティブな刺激を引き起こす要因としては、主に対人行動（社会的スキル）が重視されてきた（これを、ストレス生成モデルの

「行動過程」とよぶ)。

これに対して本研究では、「対人出来事のネガティブに偏った主観的な知覚」もストレスの1つであると仮定する。そして、このストレスの知覚に影響する要因として、「拒否への予期・感受性」という、認知・感情的要因を仮定する。そして、このプロセスを、ユーストレスの生成プロセスにも応用し、「受容への期待・感受性→対人出来事のポジティブに偏った知覚」というプロセスを仮定する。以上のような、ストレス生成における認知・感情的要因を重視したメカニズムを、ストレス（ディストレス/ユーストレス）生成モデルの「認知・感情過程」とよび、ストレス生成モデルの行動過程と区別して検討する。

これらの本研究で検討されるメカニズムは、Figure 6-1 に要約されている。また、各メカニズムの概略は、Figure 6-2 に示されている。

以下、第1項から第4項において、これらのメカニズムについて詳しく説明する。

第1項 素因ストレスモデル

素因ストレスモデルとは、「抑うつ傾向の素因をもつ者が、ストレスフルな出来事に遭遇すると、抑うつ傾向を発症させる」と仮定する、抑うつ傾向の発生に関するモデルである（詳細は第3章第1節を参照のこと）。目標志向性の素因ストレスモデルとは、「ある不適応的な目標（素因）をもっていると、何らかのストレスが生じた時に、抑うつ傾向に陥る（ないしは別の適応的な目標をもっていると、ストレスが生じても、抑うつ傾向に陥らない）」と仮定するモデルである（Dykman, 1998；目標志向性の素因ストレスモデルについては、第5章の Dweck & Leggett（

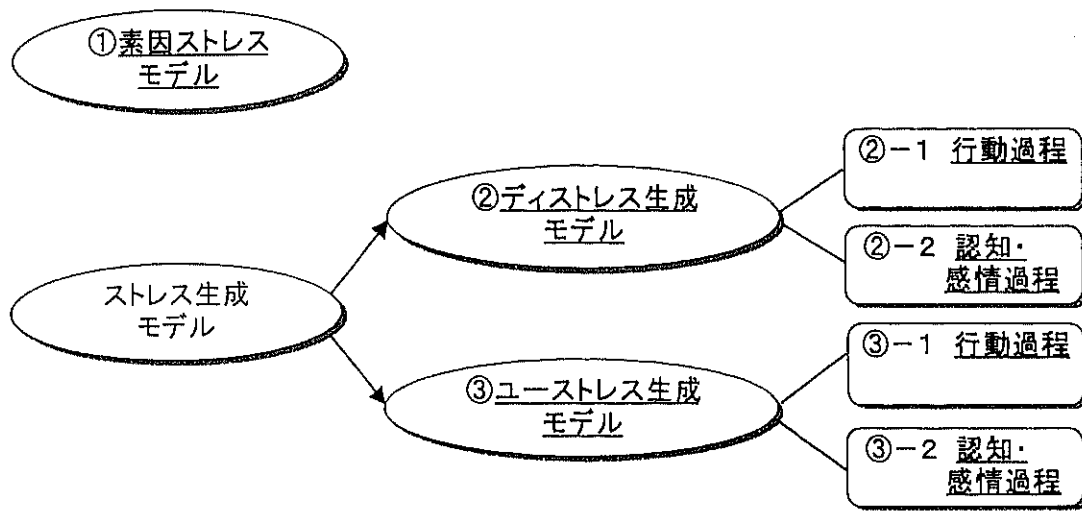
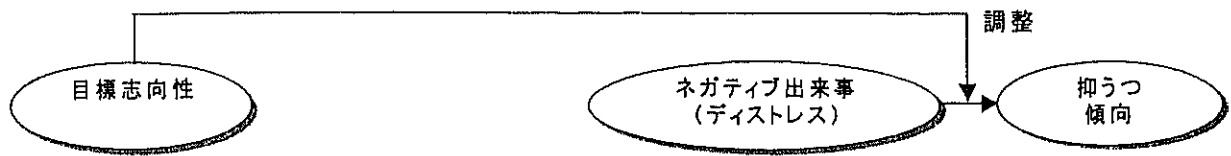
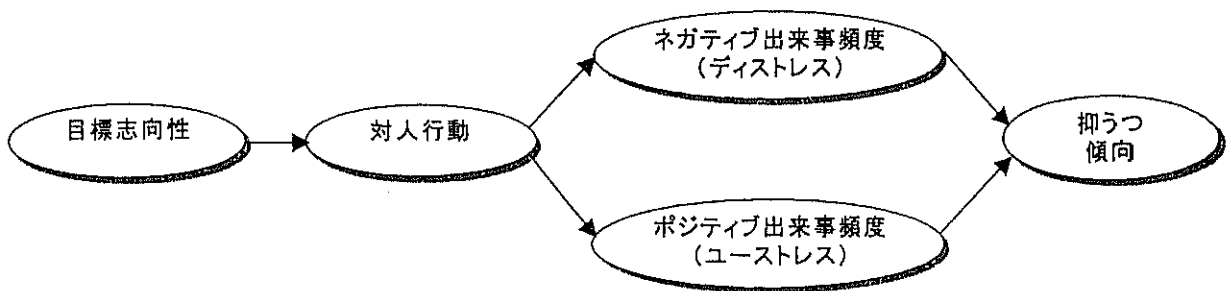


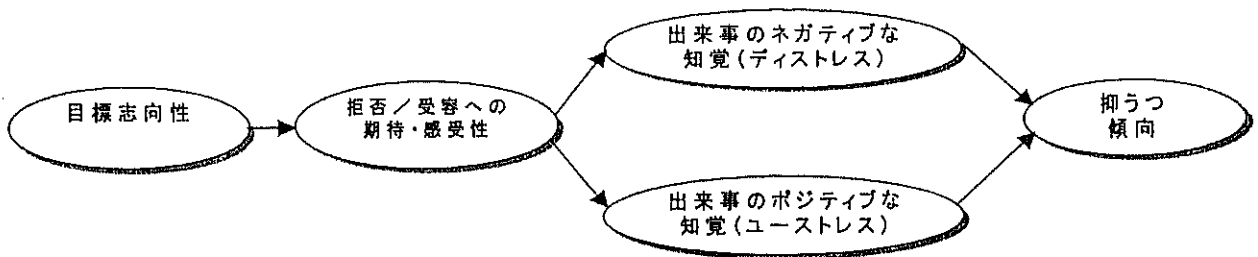
Figure 6-1 本研究で検討される抑うつ生起のメカニズム



a 目標志向性の素因ストレスモデル



b 目標志向性のディストレス/ユーストレス生成モデル(行動過程)



c 目標志向性のディストレス/ユーストレス生成モデル(認知・感情過程)

Figure 6-2 目標志向性と抑うつとの関係に介在する3つのメカニズム

1988) の理論も参照のこと)。この素因ストレスモデルの検証として、Dykman (1998) は、自己の全体的な価値を証明しようとする目標の高い大学生は、ストレスが生じた時に抑うつ傾向に陥るという結果と、自己を成長させようとする目標が高い大学生は、ストレスが生じても抑うつ傾向に陥らないという結果を見出している。

本研究においても、この素因ストレスモデルを踏まえて、友人関係における3つの目標がそれぞれストレスと交互作用することにより、抑うつ傾向を促進ないし抑制するかどうかを検討する。

第2項 ストレス生成モデル

ストレス生成モデルとは、「抑うつになる者は、対人関係において不適切なやり方で振舞ってしまうことによって、他者からの拒絶などのネガティブなストレスを引き起こし、自滅的に抑うつ傾向を発症させる」と仮定するモデルである(詳細は第3章第2節を参照のこと)。Dykman (1998) は、このストレス生成モデルを、目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムに応用し、「目標志向性→対人行動→ネガティブな対人出来事の発生→抑うつ傾向」というプロセスを提唱した。

子どもにおいて、どのような対人行動がネガティブな対人出来事を引き起こすかと考えた時、小・中学生を対象とした社会的スキルに関する研究が参考になる(第2章第1節第2項も参照のこと)。これらの研究から、引っ込み思案行動や攻撃行動といった不適応的な対人行動は、仲間からの拒否ないしは無視といったネガティブな対人出来事を引き起こすことが明らかにされている(Coie et al., 1990; 佐藤他, 1990 など)。中学生を対象として、友人関係における目標志向性からストレス生成の

プロセスを検討するにあたり、引っ込み思案行動などの対人行動を取り上げることは、社会的スキル研究や行動的アプローチからの抑うつ研究に対しても意義をもつであろう。

そこで本研究においては、子どもの社会的スキル研究を踏まえて、Dykman の仮定した「目標志向性→対人行動→ネガティブな対人出来事の発生ないし非発生→抑うつ傾向ないし非抑うつ傾向」というプロセスを検討する*。

第3項 ストレス生成モデルの拡張—「ユーストレス生成モデル (eustress-generation model)」の提唱—

ところで、近年のストレスに関する研究から、ストレッサーには、抑うつ傾向などのネガティブな反応を引き起こす「ディストレス (distress)」と、抑うつ傾向を抑制しポジティブな反応を引き起こす「ユーストレス (eustress)」の2つがあることが示されている (高比良, 1998 ; 外山・桜井, 1999 など)。しかしながら、従来のストレス生成モデルにおいては、2つのストレッサーの内、「ディストレス」のみに焦点を当て、ディストレスが引き起こされるプロセスのみを検討してきた。

これに対して本研究では、ユーストレスにも焦点を当て、ユーストレスが誘発 (ないし抑制) されるメカニズムを提唱する。ユーストレスが

* ネガティブな対人出来事を引き起こす対人行動としては、先述した引きこもり行動と攻撃行動の他、価値の保証を求める行動などがあげられる。これらの行動の内、攻撃行動と価値の保証を求める行動に関しては、①3つの目標からどのような対人行動が引き起こされるかについての理論的考察、及び、②3つの目標と抑うつ傾向との関係についての予測との整合性、の2つの基準を満たさないため、本研究では取り上げない。本研究では、後述の通り、①と②の基準を満たす引きこもりの行動を取り上げる。なお、以下、本論文では、引きこもり行動と関係構築・維持行動の低さ (非関係構築・維持行動) とは同じものと捉えて論じる。

誘発（ないし抑制）されるメカニズムの提唱により，友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在する，より多様なメカニズムが明らかにされると考えられる．

以下に，ユーストレス生成モデルの根拠となる，（１）精神的健康及びストレスに関する先行研究と，（２）社会的スキルに関する先行研究を概観する．最後に，これらの知見に基づいて，（３）ユーストレス生成モデルを提唱する．

（１）精神的健康及びストレスに関する先行研究の概観

従来抑うつ傾向を含む精神的不健康に関する研究の多くは，精神的不健康を予測・治療することを目的として，精神的不健康を促進する要因を特定することを目的としていた．

これに対して近年，ポジティブ心理学（positive psychology）という観点から，精神的不健康を予防したり精神的健康を予測する研究の重要性が指摘されている（Seligman & Csikszentmihalyi, 2000）．例えば，自分の将来について楽観的な見方ができる者（Peterson, 2000）や，自己・自分の将来・環境をポジティブに偏って知覚している者（Taylor & Brown, 1988；外山・桜井, 2000）は，精神的に不健康でない（精神的に健康である），という結果が見出されている．

そして，近年のストレス研究から，ストレスにも，生体に悪い影響を与えるストレッサー（ディストレス；distress）のみならず，生体に良い影響を与えるストレッサー（ユーストレス；eustress）があることが指摘されている（高比良, 1998；外山・桜井, 1999 など）．友人関係におけるディストレスは「友人から拒絶された，無視された」などのネガティブな出来事であり，ユーストレスは「友人から信頼された，優しく

された」などのポジティブな出来事である。そして、精神的不健康の予防や精神的健康の促進においては、ネガティブな出来事だけでなくポジティブな出来事も考慮する必要がある。ポジティブな出来事が抑うつ傾向の発生を阻止したり、充実感を促進するという結果が見出されている（高比良，1998；外山・桜井，1999）。

以上の精神的健康やストレスに関係する研究から、他者との良好な関係の構築やサポートの享受といった対人関係でのポジティブな経験の有無が、抑うつ傾向の抑制・促進において重要な役割を果たしていることが予測される。

（２）社会的スキル研究の概観

一方、社会的適応を予測することを主要な目的とする、小・中学生の社会的スキルに関する研究から、いくつかの対人行動が仲間からの受容などのポジティブな対人出来事を促進することが見出されている。例えば、仲間への向社会的行動や積極的に関係を構築・維持しようとする行動（関係構築・維持行動）は、仲間からの受容を促進することが示されている（Coie et al., 1990；戸ヶ崎・坂野，1997など）。

これらの社会的スキルに関する研究を踏まえると、ポジティブな出来事を経験しやすい者は、意図的にしろ無意図的にしろ、他者からポジティブな反応を引き出すような適切な対人的振る舞い（例えば、向社会的行動や関係構築・維持行動）をしていることが考えられる。その結果、抑うつ傾向などの精神的不健康を阻止したり、精神的健康を促進していることが考えられる。

(3) ユーストレス生成モデルの提唱

(1) の精神的健康及びストレスに関する研究と、(2) の社会的スキルに関する研究とを総合すると、ディストレスが引き起こされるプロセスのみに焦点を当ててきた従来のストレス生成モデルを、拡張することができると考えられる。すなわち、「対人関係における適切な行動（ないし不適切な行動）が、他者からの受容や肯定的な評価などのポジティブな対人出来事を誘発（ないし抑制）し、その結果抑うつ傾向の発生が抑制（ないし促進）される」というように、ユーストレスの誘発（非誘発）を通して、抑うつ傾向が抑制（促進）されるメカニズムが考えられる。

本研究では、以上のプロセスを「ユーストレス生成モデル」とよび、抑うつ傾向の発生メカニズムに関する新たなモデルとして提唱する。そして本研究では、このユーストレス生成モデルを、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムに応用し、「友人関係における目標志向性→対人行動→ポジティブな対人出来事（ユーストレス）の発生ないし非発生→非抑うつ傾向ないし抑うつ傾向」というプロセスを仮定する。対人行動としては、社会的スキル研究においてポジティブな出来事を促進することが見出され、かつ友人関係における3つの目標のいずれかから引き起こされると予測される、向社会的行動と関係構築・維持行動を取り上げる。

なお、以下、本論文では、ネガティブな対人出来事であるディストレスのみに焦点を当てていた従来のストレス生成モデルを、「ディストレス生成モデル」と表記する。

第4項 ストレス（ディストレス／ユーストレス）生成モデルにおける 新しいプロセス—認知・感情過程の提唱—

上記のストレス生成モデルを検討する研究においては、「ストレス」は、「生体のネガティブな反応を引き起こす、客観的に測定されるネガティブな刺激」と考えられてきた。例えば、うつ病者や抑うつ者がストレスを引き起こしているかどうかを検討する研究において、ストレス（ストレッサー）は、うつ病者や抑うつ者に対して他者が実際に拒絶したり、対立を起こしたりすることであると仮定されている（例えば、Baker, Milich, & Manolis, 1996；Flett et al., 1997；Hammen, 1991；Joiner, 1999；Potthoff, Holahan, & Joiner, 1995）。

しかしながら、「ネガティブなストレッサーである」と、第三者から明らかに判断されない出来事であったとしても、当事者がそれをネガティブに歪んで解釈すれば、その出来事はその人にとってはネガティブなストレッサーとなるであろう。例えば、Aさんが2人の友達（BさんとCさん）と一緒にいたとする。そして、Bさんからの働きかけは、AさんよりCさんに対して多かったとする。この時、BさんはAさんを明らかに拒否しているわけではなく、この状況を、第三者がネガティブなストレッサーであると判断するのは難しい。しかしながら、当事者であるAさんが、この状況を、「Bさんが自分よりCさんに働きかけることが多いのは、Bさんが自分を嫌っているからだ」とネガティブに解釈することもあろう。

このようなことから、個人がストレスを経験したかどうかということを考える時には、第三者から客観的に測定されるストレッサーのみならず、その当事者が対人関係における出来事をどのように評価しているか

を検討することも重要であると考えられる。

ところで、従来のストレス生成モデルにおいては、より客観的な刺激であるストレッサーを引き起こす直接的な要因としては、主に社会的スキル（対人行動）が取り上げられてきた（Davila, Bradbury, Cohan, & Tochluk, 1997）。それでは、出来事のネガティブに偏った主観的評価を高める（主観的なストレス感を高める）心理的要因は何であろうか。

例えば、拒否に対する感受性が強く、他者からネガティブな反応をされることを強く予期する個人は、他者から自分への反応をよりネガティブに偏って解釈することが多くなるであろう（本多・桜井, 2000）。逆に、それを予期しない個人は、他者からの些細な反応をネガティブに解釈することは少ないであろう。上の例で言えば、Aさんは、対人関係において常に拒否されることにおびえているために、対人関係における些細な出来事をネガティブに偏って解釈しやすいと考えられる。まとめると、拒否への予期や感受性といった認知・感情的要因が、ネガティブに偏った出来事の知覚に影響すると考えられる。

以上を踏まえて、本研究では、既存のストレス生成モデルにおけるストレスの定義と対人行動の過程を拡張し、新たにストレス生成の「認知・感情過程」を提唱する。より具体的には、「拒否への予期や感受性といった認知・感情的変数は、出来事のネガティブに偏った知覚を促進する」という過程を提唱する（ディストレス生成モデルの認知・感情過程）。そして、この過程を、「受容への期待や感受性といった認知・感情的変数は、出来事のポジティブに偏った知覚を促進する」という、ユーストレス生成モデルの認知・感情過程に応用する。そして、以上の、ディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程を、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムとして仮定する。

認知・感情過程と行動過程の2つの過程からの検討により、友人関係における目標志向性からディストレス/ユーストレス生成までのより多様なメカニズムが明らかにされると期待される。

第3節 本研究の目的と仮説

本研究の主要な目的をまとめると以下の2つになる。第1に、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係を検討する。具体的には、Dweck & Leggett (1988) の理論通り、経験・成長目標は抑うつ傾向と負の関係を示し、評価回避目標は抑うつ傾向と正の関係を示すが、Dweck & Leggett に反して、評価接近目標は抑うつ傾向と負の関係を示すであろうという仮説を検討する。

第2に、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムを、素因ストレスモデル、ディストレス生成モデル、そしてユーストレス生成モデル（さらに、ディストレス/ユーストレス生成モデルにおいては、それぞれ、行動過程と認知・感情過程）から詳細に検討する。

友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムについての具体的な仮説は、第1節と第2節において概観した先行研究、及び、3つの目標がそれぞれどのような行動や認知・感情過程をもたらすかについての理論的考察を踏まえ、探索的に以下のように設定する。

(1) 経験・成長目標と抑うつ傾向との関係について

「様々な友人と関わるという経験を通して自己成長を目指す」経験・

成長目標をもつ者は、友人と関わるという経験と自己の成長を重視するため、

1：ストレスが生じた時に、友人関係を積極的に修復しようとしたり、ストレスを「経験の獲得や自己成長のための良い機会である」とポジティブに認知するため、抑うつ傾向に陥らないであろう（素因ストレスモデルからの予測）。

2a：積極的に友人関係を構築・維持するための行動（関係構築・維持行動）をとるため、友人からネガティブな反応をされる頻度が低まり、抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ディストレス生成モデルの行動過程からの予測）。

2b：また、友人からの拒否的な反応には関心を向けないため、友人からネガティブな反応をされているという知覚が高まりにくくなり、その結果抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ディストレス生成モデルの認知・感情過程からの予測）。

3a：積極的な関係構築・維持行動をとるため、友人からポジティブな反応をされる頻度が高まり、抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ユーストレス生成モデルの行動過程からの予測）。

3b：また、友人からの受容的な反応を期待し、友人からポジティブに受け止められているという知覚が高まりやすくなり、その結果抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ユーストレス生成モデルの認知・感情過程からの予測）。

（2）評価—接近目標と抑うつ傾向との関係について

「自分の性格についての良い評価を得ることを目指す」評価—接近目標をもつ者は、性格についての良い評価を受けることや好かれる可能性に関心を向けるため、

1：友人関係においてストレスが生じた時に、ストレスを無視し、良い評価を求めて別の友人関係を深めようとしたり、新たに構築しようとするため、抑うつ傾向に陥らないであろう（素因ストレスモデルからの予測）。

2a：友人に対して親切で友好的な振る舞い（向社会的行動）や積極的に関係を構築・維持しようとする行動（関係構築・維持行動）をとるため、友人からネガティブな反応をされる頻度が低まり、抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ディストレス生成モデルの行動過程からの予測）。

2b：友人からの拒否的な反応を無視することで、それを知覚しにくくなり、抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ディストレス生成モデルの認知・感情過程からの予測）。

3a：友人に対して向社会的行動や関係構築・維持行動をとるため、友人からポジティブな反応をされる頻度が高まり、抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ユーストレス生成モデルの行動過程からの予測）。

3b：また、友人からの受容的な反応を期待しそれに敏感になるため、友人からポジティブな反応をされているという知覚が高まり、その結果抑うつ傾向に陥りにくいであろう（ユーストレス生成モデルの認知・感情過程からの予測）。

（3）評価一回避目標と抑うつ傾向との正の関係について

「自分の性格について悪い評価を避けることを目指す」評価一回避目標をもつ者は、性格についての悪い評価を受けることや嫌われる可能性に関心を向けるため、

1：友人関係においてストレスが生じた時に、ストレスをネガティブに評価し、友人関係全般から回避するため、ストレスの影響を受けやすくなり、結果として抑うつ傾向に陥るであろう（素因ストレスモデルから

の予測)。

2a: 積極的に関係を構築・維持する行動(関係構築・維持行動)がとれず、引きこもりのようになるため、友人からネガティブな反応をされる頻度が高まって、抑うつ傾向に陥るであろう(ディストレス生成モデルの行動過程からの予測)。

2b: 友人からの拒否を予期しそれに敏感になるため、友人からネガティブな反応をされているという知覚が高まり、その結果抑うつ傾向に陥るであろう(ディストレス生成モデルの認知・感情過程からの予測)。

3a: 積極的な関係構築・維持行動がとれず、引きこもりのようになるため、友人関係でポジティブな出来事を経験することができず、抑うつ傾向に陥るであろう(ユーストレス生成モデルの行動過程からの予測)。

3b: 友人からの受容的な反応に期待を向けたり、受容的な反応を得られる可能性を考えることができず、それを知覚しにくくなるため、抑うつ傾向に陥るであろう(ユーストレス生成モデルの認知・感情過程からの予測)。

本研究の構成は次の通りである(Figure 6-3)。まず、第2部の第7章において、友人関係における3つの目標を測定できる尺度を開発し、3つの目標と抑うつ傾向との関係を検討する。第7章においては、Dweck & Leggett (1988)において仮定されている、評価-接近目標ないし評価-回避目標と自尊心との交互作用が抑うつ傾向に及ぼす影響についても検討する。さらに、友人関係における目標志向性とそれ以外の抑うつ傾向の素因(原因帰属スタイル)とで、抑うつ傾向の予測力を比較し、友人関係における目標志向性から抑うつ傾向を予測する有効性について検討する。

次に、第2部の第8章と第9章において、友人関係における目標志向

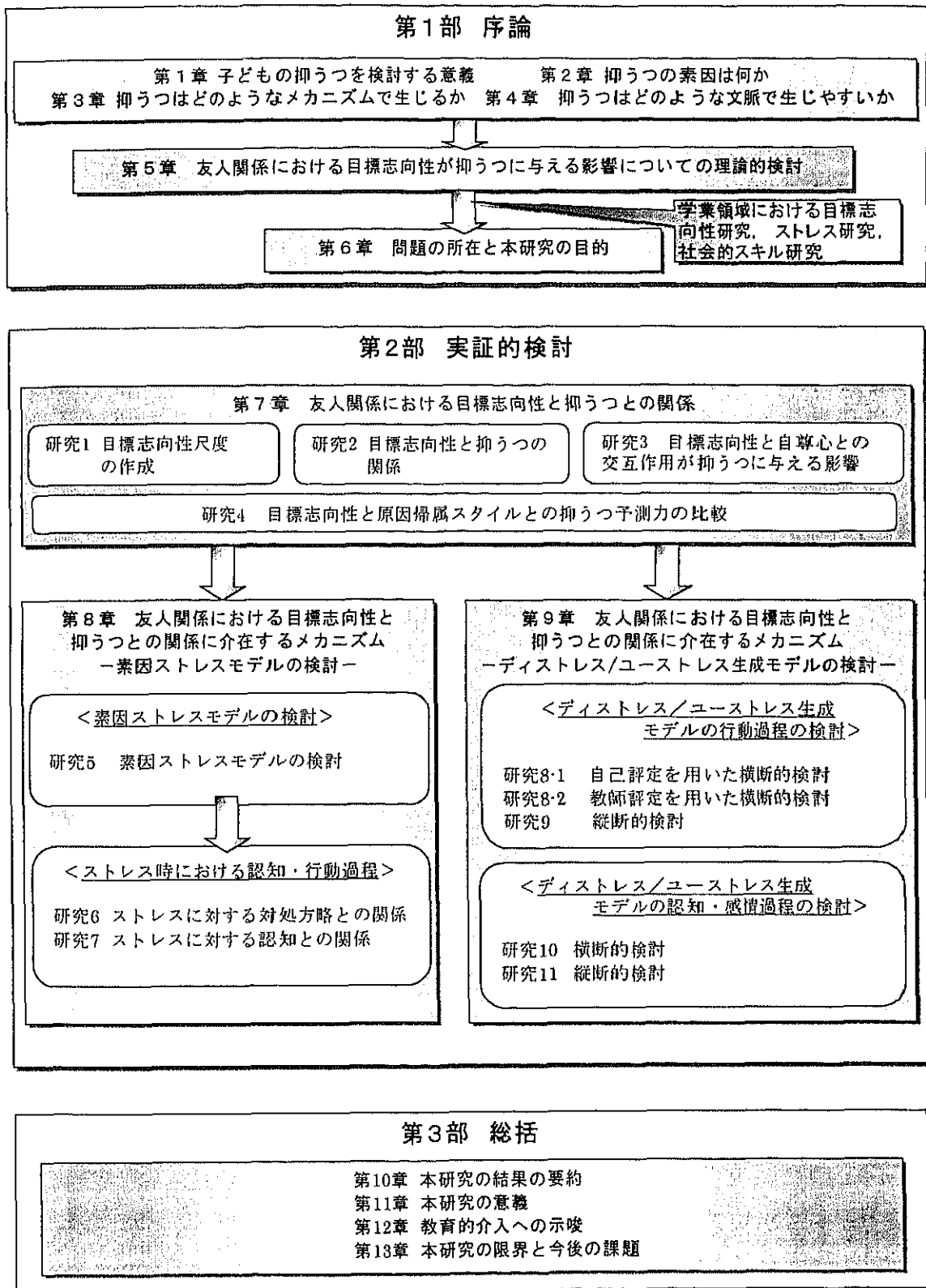


Figure 6-3 本研究の構成

性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムを検討する。第8章では、素因ストレスモデルを、そして、第9章では、ディストレス生成モデルとユーストレス生成モデル（それぞれ行動過程と認知・感情過程）を、それぞれ検討する。

最後に、第3部において、本研究の結果を要約し、総合的な考察を行う。

なお、本研究では、ストレスや抑うつ傾向を人為的に引き起こす実験による検討は、倫理的な問題があると考え、質問紙調査により仮説の検討を行う。